NPO法人ジェントルハートプロジェクト

ジェントルハート通信

No.52
2016年秋号

発行：NPO法人 ジェントルハートプロジェクト　発行日：2016年9月5日　価格：100円（会員無料）
URL：http://npo-ghp.or.jp　Tel. + Fax. 045-845-3620（小森）

「命の大切さって…」

理事 篠原 宏明

“命の大切さ”という言葉に矛盾を感じるんですよね

そんな書き出しで始まるブログがあります。このブログを書いたのは、小・中学時代に酷いいじめに遭い、現在もそのトラウマで苦しみ続けている大学生のお嬢さんです。

ブログはさらに続きます。

そもそも命ってなんで大切なのか、宗教観も精神論も何も交えずに説明できるのかな？多くの人が、自分はそう思うから、で発言してるんじゃないのかな？それってただの押し付けじゃないの？貴方がそう思うから、その都合で、一生苦しみ続けることを他人に強いることができるのか。どんな境遇であれ、どんな絶望の中であれ、生きろと言い続けるのはエゴでは？偏見でしょうか。

「命は大切」。確かにその通りです。私もそう思いますし、異を唱える方はいないと思います。

では、追い詰められて死を選ぶしかなかった子どもたちは、どうでしょうか。彼らは命の大切さを知らなかったのでしょうか？彼らだって、できることなら生きたいと思っていたに違いないとは思いませんか。

息子が亡くなってすぐ、学校は生徒たちに「命の大切さ」を訴えるべく、外部より講師を招いて講演を行いました。講演内容は、飼い主の勝手な都合で飼えなくなった犬が保健所に引き取られて、無残に殺処分されているというものでした。講師は「生きたくても生きられない命があるのだから、君たちも命を大切にしましょう！」と、大きな声で訴えていました。

そのとき突然、この話に耐え切れなくなった息子の友人が席を立ち、なんとその場を抜け出してしまいました。私は、すぐに彼のあとを追いかけて話を聞いたところ、「あれじゃ結局は、自殺した真矢が全て悪いってことになる。真矢を追い詰めた奴らこそが悪いのに」と、泣きながら話してくれました。

私は、この子の言葉にハッとしました。「命は大切だ」、「自殺はいけない」などという当たり前のことは、子どもたちは誰もがみんな知っています。命が大切だと声高に叫べば叫ぶほど、自ら命を絶った息子に対する非難が強まることを、彼は私に教えてくれたのです。

苦しみ続け、追い詰められた子どもたちに、ただ「頑張れ」「生きろ」という、当たり前の言葉を並べたところで、絶望の淵でもがいている子どもたちにとっては、そんな薄っぺらな言葉は響かないばかりか、さらに彼らを追い詰めてしまう危険性さえ有ると思うのです。

「死んではいけない」「死ぬほどの勇気があれば何だってできる」「親より先に死ぬなんて親不孝」などという、一見すると至極当たり前に聞こえる、使い古されたような「残酷な言葉」が、亡くなった子どもの尊厳と、遺族となってしまった者たちの心を深く傷つけてしまっている事に、どうか気付いてあげて欲しいのです。

私は、亡くなった我が子を含め、死を選んだ彼らを親不孝者だと思ったことは一度たりとも有りません。

そんな子どもたちを追い詰め、「死んでしまいたい」と思わせてしまった社会の有り方そのものを問い、そして彼らを死から救えなかった私たち自身を顧みて、反省すべきではないかと思っています。

どうしたら子どもたちに、生きる喜びを提供できるか。楽しく生きていけるためのサポートができるかを一緒に考えて頂けませんか。

彼女のブログは、こう締めくくられています。

自殺することは罪だとか、死ぬなとか、そういう言葉で誰が救われるの？死にたいと思い、行動しようとする人は、もうそんな価値観では生きていないんです。

死ぬな！で救われるとしたら、その言葉を発した人が、本当に自分の苦しみに寄り添ってくれようとした時なんじゃないかな。

誰かに死んで欲しくない、そう思うのならば、まずは自分が行動を変えてみることが一番重要なんだと思うんです。

彼女の言葉は、自ら死を選ぶしかなかった多くの子どもたちに代って、残された私たちに大きな課題を突き付けているように感じます。

山形県天童市女子中学生自殺事件を振り返る

理事 大貫 隆志

2016 年 7 月 29 日、山形県天童市教育委員会は、同市の中学 1 年女子生徒（当時 12 歳）が、学校でいじめを受けて 2014 年1月7日に自殺した問題で、解決金 500 万円を支払うことで遺族と和解する方針を明らかにしました。9 月の定例市議会での決議を経て、正式に和解が成立する見込みです。

（この原稿は 8 月末に執筆しています）

3 学期の始業式が予定されていたその日の朝に

山形県天童市立第一中学校 1 年の女子生徒が、2014 年 1 月 7 日の午前 8 時頃、天童市の JR 奥羽線で山形新幹線にはねられ死亡しました。女子生徒は同級生と一緒に学校に向かう途中で別れ、フェンスを乗り越えて線路内に入って自殺したとみられます。ネームプレートなどから天童一中の生徒であることが確認され、学校は始業式を取りやめ全校集会を開きました。

その日の午後、死の原因につながるものはないかと女子生徒の部屋を探していた父親は、いじめの内容や自分の思いを記した B5 版のノート 4 冊を発見しました。父親は、1 月 14 日の夕方、学校を訪れて校長と面会し「いじめがあったようなので調査をしてほしい」と申し入れました。

翌 15 日午後、学校は全校生徒約 530 人を対象としたアンケートを実施しました。13 人が女子生徒へのいじめを直接見聞きしたと答え、100 人以上がうわさを含めいじめについて知っていると回答しました。

しかしこの時点でも、天童一中校長は「これまでの学校生活に問題はない」「いじめは確認されていない」と報道関係者に説明していました。17 日に実施した教職員への調査では、いじめを認識していたと答えた教職員は一人もいませんでした。

いじめの相談に対してのずさんな対応見逃されたサイン

学校は、本当にいじめの存在を知らなかったのでしょうか。自殺の半年前、2013 年 6 月には、女子生徒の母親が担任に「ソフトボール部でペアを組んで練習する時に仲間はずれにされたり、ボールをわざと遠くに投げられたりする」と相談しています。その後、担任は電話で、加害生徒の実名をあげ「2 度とないようにします」と伝えてきました。

9月、定期アンケート「こころの点検票」で、女子生徒は友人関係について不安のレベルを「3」から「4」に上げて回答しました。この点について担任は「何かあるの?」と尋ねましたが、女子生徒が「大丈夫です」と答えたため、それ以上、具体的な対応を取りませんでした。「大丈夫」は文字通り大丈夫なのではなく、危険のサインであることは、いじめ問題に取り組むものにとっては常識とも言えますが、担任にその意識が欠けていたのは残念です。いじめを把握する機会を逸したと言えます。

4 冊のノートにつづられた女子生徒の思い

「本当ハ、『死』ニたく、なカッタだけなのに。ダレカ、タスけテよぅ。私ヲ、『生』かしテヨぅ」

ノートには、 中学に入学してから陰湿ないじめにあっていたこと、何が悪いのかも分からずに、ずっと陰口を言われていたことなど、いじめに苦しみ、死へと追いつめられる女子生徒の気持ちが記録されていました。

パパのこと好きじゃないよそれは別れの言葉だったのか

調査委員会の設置をめぐっては、市教育委員会が、遺族側の了解を得ずに設置要綱を決めたことから、公平性に欠けるとして父親が修正を要望。困難な交渉が続きました。父親は、河北新報社の取材に対してこう答えています。

「一刻も早く第三者委員会による調査を望む気持ちと、中立、公平性を確保するため設置要綱では妥協できないジレンマがある。われわれ遺族はただ真実が知りたいのです」

同じ取材で、自殺直前のエピソードを語っています。

「亡くなる4日前の1月3日。『パパのこと好きじゃないよ』と娘が話し掛けてきました。『えーなんで?』と聞くと、娘は『だって大好きだもん』と言いました。『ありがとう、パパも大好きだよ』と私が答えると笑顔を返してくれました。今にして思えば SOS のサインだったのか。

2013年6月
「部活動で独りぼっちになっていないか」と母親が担任に電話で相談

2013年9月
不安度を 5 段階で自己評価する学校調査で、生徒が友達関係に 4 をつけて担任と面談

2013年7月24日
担任との二者面談で母親が経過観察を依頼

2014年1月
いじめの事実を記したノートの存在を学校・市教委は把握。校長は「いじめはないと思っていると発言

2014年1月7日
女子生徒が山形新幹線にはねられ死亡

2014年1月15日
父親からの要請を受け全校生徒を対象にアンケートを実施

2014年1月20日
天童市議会常任委で、市教委が「学校と市教委の対応が不十分だった」と陳謝

2014年3月13日
学校・市教委側に事実解明を促すために、遺族がノートの一部を公開

いや、別れの言葉だったのかと今でも思い悩みます」

「娘はなぜ死ななくてはならなかったのか」。女子生徒の自殺後、ずっと問い続けてきた父親は、調査委員会の報告書を心待ちにしていました。しかし、報告書が公表される直前の 2015 年 9 月 9 日、がんのため亡くなりました。45 歳でした。

「教師はいじめに対する認識や理解を欠いていた」と報告書で指摘

2015 年 10 月 5 日、「天童市立中学校に通う生徒の死亡事案に関する調査委員会」は、調査結果を公表しました。報告書は A4 サイズで 134 ページにも及ぶものでした。報告書をもとに、いじめの実態を簡単に紹介します。

●

いじめを主導した加害生徒 A は、「女子にぎやかグループ」の中心人物でした。グループは、遠慮なく大声でしゃべり、誰彼構わず悪口を言いました。女子生徒の所属するソフトボール部でも、A を含む「女子にぎやかグループ」メンバーが影響力をもっていました。

自殺した女子生徒は、一人で本を読んだりすることが多かったといいます。そんな様子が、グループにとっては「異質で暗い」と感じられ、次第に悪口へと結びついていきました。5月下旬から、部活動とクラスで複数の生徒から、悪口や陰口、仲間はずれなどのいじめを受けるようになっていきました。女子生徒は気にしないふりをしていましたが、7月上旬には、「私何か言われてる?」とクラスメートに聞き、悪口への不満を漏らしています。

部活動では、ペアを組む多くの練習でいつも1人余る存在にされ、相手を探し回る姿を嘲笑されました。捕球できないボールをわざと投げられる光景も見られました。

9月10日前後、1 年生部員の雰囲気が悪くなっていることを感じた顧問は、1 年部員だけのミーティングを開きました。ここでは、女子生徒の性格の問題を指摘する声も上がり、これに対して顧問は「陰口でなく、みんなの前で」言うよう指導し、女子生徒は「仲間外れをしないでください」と泣きながら訴えました。一方で、加害生徒の悪口や問題行動を非難する声が上がり、加害生徒は逆恨みして、さらに激しくいじめるようになりました。

11月になると、いじめが常態化しました。A は他の生徒には無視や、仲間外れにするよう働き掛けました。女子生徒は、授業中までノートに絵や小説を書くことに没頭するようになり、教師もこれに気づいています。友人とも話さなくなり、「見て分かるくらいの孤立感」があったといいます。

女子生徒が自殺した日は、新築した校舎を初めて使う日でした。遺族は、新校舎に来ないよう言われたことが引き金になったとみています。

「一生懸命やってみたが状況の改善につながらず、自分を押し殺して心を閉ざした。いじめは収まらず、追い詰められ、自殺を選んだ」と報告書は結論付けました。報告書はまた、「教師はいじめに対する認識、理解、解決への意欲を欠き、情報、兆候を学校全体で共有せず、対応すべき組織も機能しなかった」、「教師が知らず知らず情報の重要性を選別し、(いじめの) 兆候となる情報を組織的に共有する意識に欠けていた。情報の価値、重みを選別せず全ての情報を共有すべきだった」と厳しく指摘しました。

ようやくの担任・顧問の謝罪 そして減給という軽すぎる処罰

2015 年 10 月 7 日、担任と部活動顧問らは遺族宅を訪ね、「かけがえのない命を守ることができなかった。対応に不十分さがあった」と事件以来初めて謝罪しました。

天童市長もこの日、焼香に訪れていますが、「学校の設置者として責任がある」と述べただけでした。市長は取材に対し「責任があるという発言に謝罪の意も込めた。言葉足らずであったなら、遺族に大変申し訳ない」と答えています。遺族が「明確な謝罪の言葉がなかった」と感じるのも当然でしょう。

2016 年 3 月 15 日、山形県教育庁は当時の学級担任と部活動の顧問を減給 10 分の1 (3 か月)、学年主任と教頭を戒告処分としました。校長はすでに退職していたため懲戒処分は免れましたが、県教育庁は重大な管理監督責任があったとしています。

保護者が相談していたのに、担任らが報告を怠るなど適切な対応をしなかったことを理由としていますが、いじめに対する理解が浅く、重大事態へと結びつく可能性があることに対する認識不足が最悪の結果を招いたことから考えると、この処分はあまりにも軽すぎるのではないかと思います。

2014年4月4日
「いじめと見られる行為があった」との認識を学校が示す

2014年7月7日
遺族が記者会見でいじめの存在を強調

2014年7月16日
校長が「部活動などで十数人がいじめに関わっていた」。翌朝「十数人には傍観者も含む」と訂正

2014年9月24日
遺族の要望を踏まえた調査委員会の設置要綱を決定

2015年10月5日
調査委員会が学校の落ち度認める報告書を提出

2016年7月27日
遺族側は早期解決を図るため、市側に解決金500万円による和解案を提示

2016年7月29日
市側が議会総務教育常任委員会で解決金500万円を支払い和解する方針を明らかに

2016年8月23日
天童市長、遺族側が強く求めていた謝罪の記者会見を行わない考えを表明

心と命を想うサイパンの旅

理事 小森 美登里

香澄が亡くなり今年で 18 年が過ぎました。

今年 34 才を迎えるはずだった命は今、自殺行為 4 日前に私に言った「優しい心が一番大切だよ」という言葉の中に生きています。

ところで皆さんは寺尾聰さんが主役の TBS ドラマ「仰げば尊し」をご覧なった事があるでしょうか。実は香澄の在籍していた野庭高校吹奏楽部の指導者である中澤忠雄先生のドラマです。

香澄はこの中澤先生と野庭サウンドに小学校の頃からあこがれ、入部しました。

中澤先生の指導のモットーは「音楽は心」という言葉なのですが、私は香澄が命に代えて遺した「優しい心が一番大切だよ」という言葉がこれと共通しているように感じてならないのです。香澄は「人と人は心で繋がっている。優しい心でつながってね。」と言っていると理解し、その言葉に香澄の存在を実感しているからです。

なので、私達の法人は心を何より優先し「心と体への暴力」をいじめの定義としているのです。今後も「音楽は心」の精神と「野庭サウンド」が継承され「野庭の灯」が灯し続けられることを祈らずにいらせません。

そして香澄の遺骨は今、サイパンの海の中にいます。

サイパンに散骨した理由は、香澄がサイパンをこよなく愛していたことと、おじいちゃんの納骨時「私この中に入るのイヤだ。サメに食べられた方がまし。サイパンの海がいい。」という一言を私が覚えていたからです。

そうは言っても同居しているおばあちゃんの思いもあり、10 年間はおじいちゃんの隣で過ごしていました。その間は、毎週土曜日をお墓参りの日と決め、お花とお菓子を欠かすことはありませんでしたが、香澄の言葉が忘れられない私は意を決しておばあちゃんに散骨の意向を伝えました。

そして、十分な納得を得られたとは言えませんでしたが、両親のわがままということで何とか理解してもらい散骨の運びとなったのです。

それからは年に一度命日前に、慰霊の想いを込めサイパンの香澄の元へ旅をしています。

気付くと、夫婦だけで行くことはほとんどなく、いつもどなたかが同行してくれています。

今年は 6 月に、理事の篠原夫妻、青森県八戸市のいじめ自殺遺族の大森夫妻の三家族で行く事となりました。

当然ですが、この三家族共、我が子をいじめ自殺で失った遺族であり、偶然に命日が 6 月と 7 月の遺族です。

大森夫妻は二年前に当時高校二年生(17 才)の七海(ななみ)ちゃんを自殺で失い、今も失意の中にいます。私との出会いのきっかけは、七海ちゃんの事件についてマスコミが私にコメントを求めたことでした。その後私からマスコミを通してコンタクトをとり今日のご縁に至りました。この縁を生んでくれた天国の七海ちゃんと香澄には感謝しています。

私は、子どもたちの生んでくれた縁は何よりも大切にしなければならないものと思っています。人との縁は、我が子の死を無駄にしないための大切な宝、と思えるからです。

なので、天国でつながっている多くの子どもたちが心配しないよう、託されたメッセージを受け取り、親として恥ずかしくない生き方をしたいと思っています。その様な中、七海ちゃんのお母さんは私が香澄を散骨した事を知り、「七海も海が大好きだったの。ほんの少し香澄ちゃんのそばに散骨したい。」と申し出てくれました。

そして、一緒にサイパンに行き、翌日の午前中に香澄を散骨した珊瑚礁のところまでボートを出してもらい、そこに七海ちゃんをほんの少しだけ散骨しました。

ボートに乗ったその時から夫婦は無言となり、涙はほほを伝い続けていました。

空は晴天で真っ青、そして海の紺碧はあまりに美しく波は静かでした。

その美しさは、より深い悲しみを誘ったようにも感じます。

両親の手のひらに置かれた小さな七海ちゃんの骨は、大海原へ吸い込まれるように一瞬で消えていきました。

その直後お母さんは「七海良かったね」と言い、お父さんも「七海は大好きな海でこれから毎日天国だ」と言っていましたが、二人の瞳からは涙が溢れていました。

私も心の中で「香澄、海の中でももう一人ぼっちじゃないよ、良かったね。」とつぶやき、涙を抑える事はできませんでした。

良かった……と言いつつこんなに悲しいことはありません。いじめは暴力であり人を死へと追い詰める虐待です。人の心が、人の心と体を死へと追い詰めています。

「音楽は心」それは「人は心」ということなのかも知れません。

私達は、「心と体への暴力であるいじめ」で苦しむ子どもたちがいない社会を目指します。

サイパンの碧い海での散骨

NPO法人ジェントルハートプロジェクト主催

第１２回「親の知る権利を求めるシンポジウム」

～ いじめ防止対策推進法の見直し時期を控えて ～

開催日：　２０１６年１１月５日（土）

時　間：　午後　１:００～４:００　（１２:３０開場）

会　場：　（公財）人権教育啓発推進センター

〒105-0012　東京都港区芝大門2-10-12　ＫＤＸ芝大門ビル４階

※入場無料　事前申込み不要　　定員８０名　（先着順）

「いじめ防止対策推進法」が成立してから3年余が経過しましたが、子どもたちを取り巻く環境はどのように変わったのでしょうか?

残念ながら重大事案の対応において、学校･行政･被害者の認識に大きな開きがあるまま放置されているのが現状のようです。

当法人が以前から問題提起をしている『第三者調査委員会』の問題においても、未だに行政主導による被害者無視の優しくない対応が取られる場面が多く見られます。

今回のシンポジウムでは当法人がこの夏に独自に調査した教員向けアンケートの結果を踏まえながら、新たな解決へ向けての方策を探りたいと思います。

わたしたちが以前より提唱している「親の知る権利」といった、本来被害者に対して保障されるべき権利を、どうしたら確保していけるのか、議論を深めてまいります。

JR線浜松町駅(南口改札から徒歩7～8分)

都営三田線芝公園駅(A3出口から徒歩3～4分)

都営大江戸線・浅草線大門駅(A3出口から徒歩4～5分)

《主催》
ＮＰＯ法人
ジェントルハートプロジェクト

問い合わせ先　電話＆FAX：045(845)3620(小森)　E-mail：komori-s@npo-ghp.or.jp

講演を聞いた子どもたちの感想文をご紹介します

理事 篠原 宏明

私たちジェントルハートプロジェクトは、講演の直後に感想文を書いてもらっています。その中から、皆さんにもお読みいただきたい感想文を、随時ご紹介していきたいと思います。今回ご紹介するのは、すべて武田さち子さんの講演後の感想文です。

【高校一年生　女子】

お話を聞いて中学の頃を思い出しました。私の所属していた部活では、仲間どうしでの仲たがいがありました。個人個人で考えていることが違って、一つのことにまとまることが出来なかったことから、少ない部員だというのに３つもグループが出来てしまいました。グループでの対立だったので、みんながみんな傷つきました。中には部活を辞めてしまった人も居ました。

私は今日の話を聞いて、一番印象に残った言葉があります。「自殺」という言葉です。この言葉を聞いてドキッとしました。部活の子も、部活のことがきっかけで「生きている価値がない」と言っていたことを思い出したからです。

今思えば、この言葉を私たちは軽く受け流していたなと思いました。この言葉を言っていた友だちの気持ちを考えず、軽く受け流していたことに、大変なことになりそうだったんだなと気付きました。何も起こらなくてホッとしましたが、次は相手の「HELP」に気付いて、相手の気持ちになって自分も考えていく心がけが必要だと思いました。

【高校二年生　女子】

私は小学校のときに、いじめる側の人間になっていました。それが問題になり、話合いなどを繰り返しているうちに、自分がやっていたこと、言ってしまったことが、どれだけ人を傷つけて苦しめていたのかということに気付きました。そして、そんな自分が大嫌いになり、他人とどう関われば良いのか分からなく、中学生になって気が付けば一人で居ることが多くなりました。

そんな私は、人とコミュニケーションをとることが苦手です。自分の気持ちや意見を伝えることも、あまり出来なくなってしまいました。それは今も変わりません。そしてそんな自分が嫌いです。今でもしんどくなり、一人で抱え込んでしまうこともあります。

けれど、そんな私に気付いて理解して話を聞いてくれる人が近くに居ることに、最近気付きました。「こんな私でも支えてくれる人が居る」そう思うと少し気が楽になり、頑張ろうと思えます。

いじめを無くすのは難しいことだと思います。けれど自殺を無くすことは出来ると思います。辛くても自分を理解して味方をしてくれる人が居ると、少しは頑張れます。周りの人が変わることも大切だと思いました。

【高校一年生　女子】

「どんなに苦しいことがあっても、生きていれば絶対に幸せなことがある」とおっしゃていたことが、一番心に残りました。私は、いじめではないけど辛いことがあって、私なんか居なくなっちゃえばいいのにと思ったことがありました。その時は、生きていても幸せなことなんて、一つもないと思っていました。あの時、私の心を救ってくれた人が居なかったら、私は違う方向へ進んでいたかもしれません。そんな時に「今はしんどいけど、これを乗り越えたら絶対に幸せなことがあるから。貴方なら絶対に乗り越えられるから。」と言い続けてくださった方に感謝しています。そして、実際にたくさんの幸せを作って支えてくれた家族や友達にも感謝しています。

私には、しんどいときに助けてくれる人がたくさん居て幸せです。今でも完全に乗り越えられた訳ではないけど、今の私を一所懸命に支えてくれる人が居ることを忘れずに、日々の幸せを感じながら過ごしていきたいです。

そして、私が沢山の人に支えてもらっているように、自分も誰かを支えるうちの一人になれるように、頑張っていきたいです。今日の講演は、そのことを改めて感じることが出来て良かったです。ありがとうございました。

【中学３年生　男子】

お話や DVD を観て、いじめの辛さ、怖さを改めて感じました。いじめによって子どもを失った家族の方々の悲しさ、辛さを強く感じました。私も友だちをいじめていた時がありました。自分ではいじめているつもりはなかったのですが、相手はきっと「ひどい」、「逃げたい」と思っていたでしょう。私が逆の立場になって、改めてその辛さを感じました。

自分がいじめている時は何も感じなくても、いじめられている時は、感じることや思うことがたくさんありました。そんなことから、いじめは 100% いじめている方が悪いと思います。何か理由があるにせよ、いじめることで解決することはいけないことだし、いじめている人は、いじめでしか解決できない可哀想な人だと思います。

いじめによって傷ついている人は沢山居ると思います。周りにいじめられている人が居たら、私はその人の支えになりたい。助けてあげたいです。

◇活動のご報告と今後の予定◇

日　付	主　催　者	都道府県	都　市	人　数
2016/8/1	岡山市福南中学校区人権教育研修会	岡山	岡山	70
2016/8/8	三重県松阪地区教職員夏期講習会	三重	松阪	80
2016/8/10	和歌山県立和歌山北高等学校西校舎	和歌山	和歌山	480
2016/8/18	岩国市小中学校夏季管理職等研修会	山口	岩国	120
2016/8/20	霧島市人権フェスタ	鹿児島	霧島	500
2016/8/25	山武教育研究会第一研究分会	千葉	大網白里	250
2016/9/3	藤嶺学園藤沢中学校	神奈川	藤沢	120
2016/9/6	三郷市立南中学校	埼玉	三郷	170
2016/9/7	吾妻郡ＰＴＡ懇談会	群馬	吾妻郡	50
2016/9/9	境港市立第一中学校	鳥取	境港	300
2016/9/9	境港市中学校連合 PTA	鳥取	境港	100
2016/9/12	東海大学付属市原望洋高等学校	千葉	市原	680
2016/9/13	川崎市立はるひ野中学校	神奈川	川崎市	450
2016/9/16	茅ヶ崎市自殺対策事業講演会	神奈川	茅ヶ崎	70
2016/9/21	和水町立菊水中学校	熊本	玉名郡	140
2016/9/24	岡山市立高島小学校 PTA	岡山	岡山	150
2016/9/28	豊島学園	東京	豊島	720
2016/10/5	智辯学園奈良カレッジ	奈良	香芝	790
2016/10/6	神奈川弁護士会司法修習生研修	神奈川	横浜	15
2016/10/13	防府市立大道小学校	山口	防府	150
2016/10/14	美作市立勝田小学校	岡山	美作	170
2016/10/15	チャイルドラインあおもり	青森	青森	200
2016/10/22	川崎市立向丘中学校	神奈川	川崎	700
2016/10/25	美作市立大原中学校	岡山	美作	170
2016/10/26	備前市立日生東小学校	岡山	備前	200
2016/11/9	滋賀県立北大津高等学校	滋賀	大津	650
2016/11/11	横浜市立日吉台西中学校	神奈川	横浜	520
2016/11/15	京丹後市教育委員会いじめ防止講演会	京都	京丹後市	140
2016/11/18	川崎市立久本小学校	神奈川	川崎	300
2016/11/18	柏市立柏第三中学校	千葉	柏	410
2016/11/19	鹿沼市青少年育成市民会議	栃木	鹿沼	100
2016/11/19	糸魚川市ＰＴＡ連絡協議会	新潟	糸魚川	400
2016/11/19	高崎市ＰＴＡ第３ブロックいじめセミナー	群馬	高崎	200
2016/11/21	金沢学院高等学校	石川	金沢	320
2016/11/22	川崎市立上丸子小学校	神奈川	川崎	380
2016/11/24	小樽市立望洋台中学校	北海道	小樽	180
2016/11/25	村上市立朝日中学校	新潟	村上	420
2016/12/4	花巻市人権講演会	岩手	花巻	350
2016/12/5	周南市立小中高 PTA 連合会研修	山口	周南	
2016/12/6	柏市立柏第五中学校	千葉	柏	650
2016/12/7	柏市立富勢中学校	千葉	柏	680
2016/12/12	三条市立大島中学校	新潟	三条	100
2016/12/13	浅口市立金光中学校	岡山	浅口	290
2016/12/14	高梁市立宇治高等学校	岡山	高梁	40
2016/12/16	世田谷区人権週間記念事業「講演と映画の集い」	東京	世田谷	200
2017/1/12	山口県立防府高等学校佐波分校	山口	山口	70
2017/1/20	岡山県立倉敷鷲羽高等学校	岡山	倉敷	300
2017/1/27	川崎市立中原小学校家庭教育学級	神奈川	川崎	30
2017/2/4	江戸川ロータリークラブいじめ防止例会フォーラム	東京	江戸川	400

◇橋がかかる◇ ひととひととの出会い、そこにかかる橋

このコーナーでは、毎回、ジェントルハートプロジェクトに関わる方々の思いなどを自由に書いていただいています。
今回は、前・川崎市教育長で、現在は公益財団法人 川崎市生涯学習財団 理事長の金井則夫さんにお願いしました。

「やさしさ」がのこしてくれたもの

公益財団法人 川崎市生涯学習財団 理事長 金井 則夫

今から17年前、川崎市教育委員会学校教育部の指導主事として異動になりました。私が図工・美術科の担当として子どもたちの作品展の打ち合わせのために近くにある教育文化会館に行った時のことです。1階のイベントホールの展示会場を下見しようと、会場に入った瞬間、私自身、今までに感じたことのない空気を感じたのです。さまざまなクツが整然と並べられていて、それぞれに本当に胸を打つメッセージが書かれていました。それが初めてジェントルハートプロジェクトの取り組みを知った時でした。その後は涙が止まらず、じっと立ち止まっていたことを今でも鮮明に覚えています。

5年後に教頭として、川崎市立西中原中学校に着任することになります。着任後しばらくして、若い女性教師が私にある提案をしてきたのです。それが小森美登里さんの講演会でした。その頃から西中原中は全国一の大規模校でしたので、いきなり学校行事で取り組むには非常に厳しい状況でした。

しかし、その若い教師の熱意と私自身の思いも重なり、校長に提言したのです。講演会では、展示やアンケート、相談週間等を含め、1週間程続きました。私はその時に、子どもたちとともに「人の命とは何か」を改めて考えざるを得ませんでした。

その後、何年かして再び教育委員会に戻り、2年目に教育長を仰せつかることになりました。2ヵ月後には、初めての議会対応に追われていましたが、議場でこれから答弁という時でした。私に渡されたメモには、篠原真矢さんの悲しい報せが書かれていました。答弁をしながらも、頭の中は真矢さんのことでいっぱいでした。議会終了後に記者会見もあるということで、教育長室に戻ると各部長及び担当課長等が深刻な顔をして待機していました。今後の対応について、さまざまな意見を聞いたあと、私は少し、厳しい口調でこう言いました。「亡くなられたお子さんはもちろんだが、その親御さん方はどんな思いでいるのか、考えてほしい。」と。これまで他都市で起きた悲しい出来事に、各教育委員会はどのような対応をしてきたのか・・・。

私自身、先ずは、真実を徹底的に調査すること。そのためには第三者を含めた調査委員会をつくることが大切だというような内容を伝えました。その後、さまざまな方の協力もあり、報告書が作成されました。担当課長・指導主事は、毎日のように自分の足で調査を続け、私にも逐次、その報告を忘れませんでした。その中でも、私は真矢さんがいつも大切にしていた「利他の心」に衝撃を受けたのです。そこには他者に対する真摯なやさしさと共に、正義感を臆することなく出す勇気を感じ取ったのです。恥ずかしながら、私は教員になった頃、子どもたちにいつも「正義は必ず勝つ」と言ってきました。それは、私の新任教師としての哲学だったのかも知れません。

しかし、子どもたちはその言葉をどう解釈していたのでしょうか。真矢さんの遺した言葉を今再び噛み締めてみると、教育のあるべき姿をもう一度見つめ直すことの必要性を感じずにはいられません。

ここで、哲学者の鷲田清一さんの『価値の遠近法』についての話を紹介したいと思います。①絶対なくしてはならないもの、見失ってはならないもの。②あってもいいけど、なくてもいいもの。③端的になくていいもの。④絶対にあってはならないもの。どんな状況にあっても、この四つを見分け、きちんと仕分けることの出来る判断力・眼力が『価値の遠近法』であり、そうした力を人はこれまで「教養」と呼んできたのだと言っています。

下の絵は真矢さんが亡くなって一ヵ月後、どうしても絵筆を握りたくなり描いたものです。

『LOVE ／不安定なレモン』2010年
22.5×22.5cm　板にアクリル絵具

窓のむこうに不安定なレモンとガラス玉が見える。レモンを支えているのは金色の糸。レモンが幼い子どもだとしたら、この二本の糸は母親と父親なのかも知れない。（N.K）